

スチール缶リサイクル協会

'23年度リサイクル率93.5%

13年連続で90%以上を達成

スチール缶リサイクル協会は15日、鉄鋼会館(東京・中央区)で「2023年度スチール缶リサイクル率・リデュース率」等の記者説明会を開催。廣瀬孝理事(日本製鉄代表取締役副社長・写真中央)、倉持隆志副理事長(東洋製罐執行役員品質保証機能担当・同右)、高橋宏郁専務理事(同左)が出席し概要を説明した。

2023年度のスチール缶リサイクル率は93.5%

となり、13年連続で90%以上を達成したほか、21年度からスタートした「自主行動計画2025」(第4次自主行動計画)におけるリサイクル数値目標「93%以上維持」もクリアした。海外のリサイクル率(EU22年度80.5%、米国18年度70.9%)に比べ、日本は非常に高いレベルを維持している。また、23年度のスチール缶リデュース率は、基準年度となる04年度実績比で1缶当たり9.86%(3.50g/缶)の軽量化を実現。「自主行動計画2025」の目標である「1缶当たり重量9%の軽量化」を3年連続で達成した。

支援事業では、スチール缶の集団回収を実施している団体や環境教育に取り組み小中学校への支援・表彰を継続。24年度は75団体(支援総額150万円)、60校(同350万円)を計画している。また、スチール缶の散乱防止・再資源化を推進

するための普及啓発・広報活動にも注力し、1973年から実施している散乱防止・美化推進啓発活動を推進。今年度は6月2日に福井県敦賀市、10月12日に島根県出雲市で実施した。これまで北海道から沖縄まで367カ所で実施、515回を数える。このほか、環境イベント等への出展や小学生など一般向けの製鉄所見学会を

実施して環境に配慮したもづくりや環境活動への理解向上に努めている。さらに、鉄で出来ているスチール缶はリサイクル性が優れていて、地球環境負荷の低減に寄与することを認知してもらおう新しいキャッチコピー「使うほど地球にやさしいスチール缶」とロゴマークをつくり、様々なシーンでPRしていく。

「三浦正幹



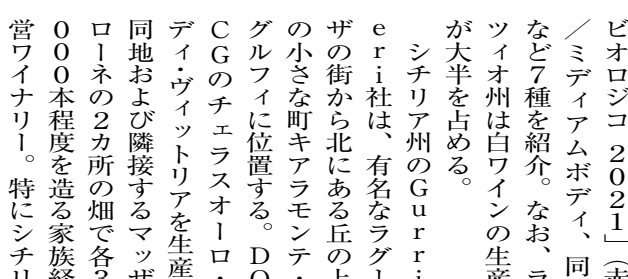
「2023年度スチール缶リサイクル率等について」スチール缶リサイクル協会

「イタリアワイン試飲会」ラツィオとシチリアの土着品種を探索する」がこのほど、日比谷パレス(東京・千代田区)で開催された(主催) Gurrieri社/Cincinnati社、協賛「アプレヴェレディング、運営」 SOLLOITALLIA。林茂氏(SOLOITALLIA代表・写真左)によるセミナーも

実施。ラツィオ州のCincinnati社は、土着品種「チェザネーゼ(黒)、ネロ・ブオーノ(黒)、ベッローネ(白)」等を中心に生産。ローマから南東60kmの丘陵地帯に位置する町、コリアのブドウ栽培農家が設立した協同組合。110haの有機認証畑を所有。アイテムは「クイント・ベッローネ・ピオロジコ2022」(白/辛口、税別2500円)、

「レリオネロ・ブオーノピオロジコ2021」(赤/ミディアムボディ、同)など7種を紹介。なお、ラツィオ州は白ワインの生産が大半を占める。シチリア州のGurrieri社は、有名なラグーザの街から北にある丘の上の小さな町キアラモンテ・グルフィに位置する。DOGのチェラスオーロ・デイウィットリアを生産。同地および隣接するマッサローネの2カ所の畑で各3000本程度を造る家族経営ワイナリー。特にシチリアの土着品種ネロ・ダヴォラ(黒)とフラッパー(黒)に注力し、この2種をブレンドした「チェラスオーロ・デイウィットリア2019」(赤/フルボディ、3200円)や、単一品種の「ネロ・ダヴォラ2020」(赤/ミディアム、3000円)、「フラッパー2020」(同、同)など。上記2品種の黒ブドウで造るユニークな白ワイン「ドンナ・グラツィア・ピアンコNV」(白/辛口、3300円)も提案。

「使うほど地球にやさしいスチール缶」



使用済みのスチール缶をはじめとした鉄スクラップを1トン再生利用することにより、1.39トンのCO2削減に貢献します。スチール缶はたくさん使ってリサイクルするほど地球にやさしい容器です。